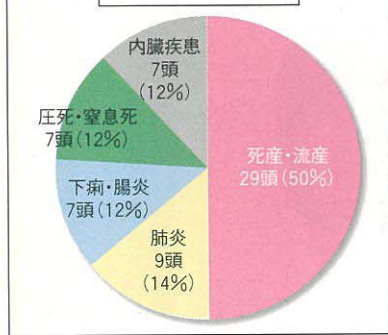


診療所だより

子牛の死廃要因



分娩前は胎児が急速に成長する時期なので、牛が栄養不足の場合は子牛の成長が悪くなったり、流産になったりする危険性があります。実際に子牛の事故の中では、流産や死産、分娩時の事故死が非常に多い現状にあります。子牛の生産率を高める



分娩2〜3カ月前の管理

ためにはこの時期からの管理を特に重視してください。

給与する飼料は、牧草が十分に与えれば特に濃厚飼料を与える必要はありません。濃厚飼料の多給は内臓に脂肪を付けやすく、難産や繁殖成績を低下させる原因となるので注意してください。

分娩前後の管理

分娩2週間前になったら分娩房に移動させ、ストレスのない環境で自然分娩させてください。母牛が汚れていたり牛舎内が汚れていると、子牛の下痢発生率が高くなります。分娩房は牛を入れる前に必ず清掃と消毒を行い、敷き料をたくさん入れて清潔な環境を作ってください。

【お産の準備】

- 1週間前から濃厚飼料を中止する。
- 消毒し敷きわらを十分入れた分娩房（15㎡前後）に母牛を入れる。
- 母牛の神経をさかなでないように観察する。夜も時々観察する。

- 母牛の外陰部、尻、腰、尾の裏を消毒する。

【お産の立会い】

- お産は自然分娩を基本とし、助産を急いで行わない。
- 胎児の肢蹄の方向に注意し、異常を感じたら消毒をして産道に手を入れ分娩の進み具合を確かめる。難産になりそうな場合、獣医師に連絡する。



【分娩後】

- 生まれた子牛が呼吸をしないときは鼻孔と口内の粘液をふき取り人工呼吸をする。
- 体を良く拭いて、皮毛が早く乾くようにする。冬は暖房をする。
- へその緒が長いときは根元かへその緒が長いときは根元か

ら5センチで切り、血液を出してからヨーチンを塗る。

- 子牛が初乳を飲んでいないか確認する。初乳を飲まない場合、母牛が飲ませない場合は乳牛の初乳か人工初乳を飲ませる。できれば、抗体（子牛を病気からまもる物質）入りの人工乳をあらかじめ農協で買っておく。

昼間分娩の実施

分娩2週間前から母牛へのえさ給与を、夕方5〜7時ごろに1回だけ（水は不断給与、朝の残飼は取り除く）にする、7割以上が昼に分娩するようになります。

分娩時には必ず立会い、子牛への消毒とふき取りを行い、母子ともに異常がないかを確認してください。